

『おもてなしとホスピタリティの文化学』

LIBRARY ICHIKO 146 SPRING 2020 4月30日 発売予定

新型コロナウイルスで世界中が大変なことになっているが、そこには医療と医療化との違いが混在されて、多分に混乱が派生している。個々人の自律性の癒す力次元と、いわば、医療化された社会世界での産業経済や産業的統治政策の社会次元と、痛み・病い・死に対する文化的次元とが、医療行為と医療化との関係の中に一束たんにこめられて混乱している。医療行為は本質的に患者と医師の1対1の「身体」を対象にしたホスピタリティ的な関係にあるものだが、医療化は多対多数の「人口」の場に置かれたサービスの関係に置かれている。これが拡大していく過程で、人口総体に対する統治の技術の問題になって、そこに医療行為ではない物事が医療化判断され、諸個人の自律性が医療化依存へと転倒する。今にも自分の脇に起きてくるかもしれない「不安」「心配」が医療化された意識において、まだウイルス自体が何であるかが解明されていないことに対応して拡大する。歴史的に、疫病はそれが衰退してからワクチンが発明されるのであって、医学的処置が疫病を鎮静させたのではない。人類はウイルスとの戦いを生き抜いてきた。医療は後追いで、その鎮静後の拡大を制御してきた。

医療化の浸透は、依存意識と依存関係の自律力麻痺を拡大させ、さらに歴史的には保健衛生を媒介に人口統治のパワー関係と経済の医療化を拡大させた。この領域が、予防の統治の医療マターによって医療自体ではない経済の停滞を余儀なくさせられる。当事者たちは、自己生命の存続に関わる事態になるが、非当事者たちは生存危機に関係づけられるかのようになってしまう。医療の臨床的技術次元、医療化の社会的次元、そして生命に対する文化的次元を混同せずに考える自律性を自らに取り戻す機会である。

オリンピックを前に「ホスピタリティ」と「おもてなし」の関係はサービスとの関係も含んで明証にしようとしたのだが、パンデミック現象によってオリンピックは延期されることになった。

日本の茶文化、メガネの技術は、典型として他律様式と自律様式の均衡関係に配置されており、またホテルの営みはその総合体であるのだが、ホスピタリティ(1対1)とサービス(多対多)の原理・技術の相反的關係の根源を見直す指標である。おもてなしは、その二つの様態の「物語化」になる。本質から社会表象事態を考えねばならない。

医療化サービスは「へわたし」と無縁の關係に配備されるが、医療行為は「へわたし」に直面してくれるものを言う。感染症に直面して医師たちはそこに引き裂かれてしまう中で生命を賭して戦っている。そして、まだ感染していない自分が病いに対峙するのは自律性であって、他律性ではない。

「LIBRARY ICHIKO」は季刊誌です。次号は二〇二〇年七月末発行予定



A5変形 128頁 定価(本体1,500円+税)

【監修・アートディレクター】
河北秀也(かわきた ひでや)
1947年生まれ。日本ペリエールアートセンター主宰。著書に『デザイン原論』など。
本誌プロデューサー、アート・ディレクター。

【編集・ディレクター】
山本哲士(やまもと てつじ)
1948年生まれ。
政治社会学、ホスピタリティ環境学。
主な著書に、『ミシェル・フーコーの思考体系』、『ホスピタリティ講義』、『国つ神論』、『くもの日本心性』、『高倉健・藤純子の任侠映画と日本情念』、『フーコー国家論』ほか多数。

ご注文はメールで FAX. 03-3294-2177

文化科学高等研究院出版局 tel.03-3580-7784 fax.03-5730-6084

おもてなしとホスピタリティの文化学

LIBRARY ICHIKO 146 SPRING 2020 1500円(税別)

ISBN 978-4-910131-01-6 C1010 ¥1500E

貴店名

部数

冊

文化科学高等研究院出版局

Email: ehesc@gol.com ehescbook.com